

石山寺兜跋毘沙門天像に関する一試論

近藤 謙

〔抄録〕

本論は、石山寺兜跋毘沙門天像に関して、その図像的特徴および造像主導者を、作品自体の有する情報と石山寺自体の平安初期における密教化という二点から分析しようと試みたものである。兜跋毘沙門天には西域色の濃厚な東寺像、中国化された延暦寺神将形式像、両者の折衷様という三類型が存在し、石山寺像はこの内延暦寺系に属する、とされてきた。本論ではこの点に関し通説と異なり、東寺像特有のモチーフが数多く石山寺に認められる

ことを指摘し、兜跋毘沙門天像の形式分類を再検討している。また石山寺の密教化に貢献した醍醐寺が石山寺像の造像を主導した可能性に関し、上醍醐如意輪堂と石山寺の尊像構成の比較を通じて分析した。

キーワード…兜跋毘沙門天、石山寺、聖宝、醍醐寺

問題の所在

観音の御寺として著名な近江の古刹石山寺、この寺院の毘沙門堂に石山寺兜跋毘沙門天像（以下「石山寺像」と略す）【図1】は安置されている。平安京羅城門の楼上に存在したとの伝承を伴う著名な東寺兜跋毘沙門天像（以下「東寺像」と略す）【図2】と比較すると、一見して通常の神将形像と異ならないこの像は、従来、そのすぐれた彫

技にも関わらず、彫刻史的な位置づけは不明確なままであった。

かつて猪川和子氏は、兜跋毘沙門天と称される一群の彫刻には東寺式、延暦寺系の神将形式及びその折衷式の三類型が存在し、その主流は奈良時代以来四天王など一般の神将形天部像がまとう唐式甲冑制で表されるものであることを論じられた。¹⁾（これを以下「神将式」と略す）さらに氏は兜跋毘沙門天の特色はその甲制によるのではなく、両足を支える地天女の有無による、とする重要な区分を指摘された。そして



【図1】兜跋毘沙門天像 石山寺
(奈良国立博物館提供)



【図2】兜跋毘沙門天像 東寺
(至文堂『日本の美術 毘沙門天像』)

東寺式、神将式の両者とも既に平安初期より併存しており、後者は前者の和様化として説明されうるものではない、と結論されている。石山寺像はこの神将式の古例として一応の分類を与えられていたのである。

さて近年、岡田健氏による東寺像羅城門安置説の否定を初めとして、毘跋毘沙門天研究は、未だ解決されない「トバツ」の字義の解明といつた名称起源論を離れ、個々の作品の実態に迫ろうとする分析が主流となりつつある。この様な状況の中で、石山寺像に関しても、松浦正昭・丸山士郎・神田雅章氏らによる、間接的ながら重要な提言が行われ、猪川氏以来定説と化してきた「延暦寺系の神将形毘跋毘沙門天の古例」とする分類が大きく揺らぎつつある。

本論においては近年の諸氏の提言に導かれつつ、一木彫の堂々とした力感と、腰高のプロポーションによって支えられた、武神としての不思議な風格をまとうこの石山寺像に関して、彫刻史上におけるその位置づけと、造立経緯に関し、一つの試論を提示したいと考える。

なお近年、「毘跋毘沙門天」の尊名が中國大陸において未だ見出されない事から、この名称を大陸の作例に適用することに疑問が提出されている。岡田氏はこの見解にのっとり論中において東寺像を中国彫刻として扱うに際しては、「毘跋」の語を用いず、「毘沙門天」と表記されている。諸氏の指摘されるように「毘跋毘沙門天」が日本に請求された九世紀段階においては、単なる「毘沙門天」と称されている可能性が高い。本稿で論ずるところの石山寺像に関しても、かつては一般の「毘沙門天」として祀られていたという。しかしながら本稿中では名称の混乱を避けるため、既に広く普及している「毘跋毘沙門

天」の名称を用いる事とする。

(現状)

石山寺毘跋毘沙門天像【図1】は現在、同寺本堂に東面して立つ毘沙門堂に本尊として安置されている。像高約一七二・四cm、地天女・二鬼をふくめると約二〇三cm、右手に三叉戟を持し、左手に塔を捧げ、腰に剣を佩く。本体は檜の一木よりなり、後頭部、背中、腰に内刳りを施し、背板をあてる【図3】体側部で割刳を行っている可能性が示唆されているが、現状では判然としない。【図4】また頭部は現状で高髻が露出しているが、かつては宝冠を戴いていたらしい削り出しが地髪部に認められる。胸甲部の鬼面等には部分的に木屎漆による盛り上げが施されている。地天女・二鬼【図5】は本体とは別材よりなり、背面に背板があてられる。二鬼は、その特徴的な眉の形状が本体の眉と酷似し、また本体胸甲部に表された鬼面に関しても二鬼の表情と同様の作風の特徴がみうけられる。本体および地天女には大きな修理・改変の形跡は認められず、総じて保存状態は良好である。本体と地天女は当初より一具のものとして造像されたと考えて問題ない。彩色は肉身部を朱色系統で、甲冑には緑青を多用する。甲冑の小札部、箆手、脛当その他に漆箔を施す。彩色の多くは補彩と考えられ、各部に表された文様も当初のものであるか否か疑問が残る。しかしながら後世の改変ではなく、基本的に造像当初の状態を踏襲する形で補彩されている可能性が高い。注目すべきは眼球と甲冑部分である。まず眼球部であるが、この瞳は造像当初の原位置を伝えていると考えられ、その向かって右下方へ向けられた視線は東寺像【図6、図7】の視線の方向と



【図3】兜跋毘沙門天像（背面）石山寺
(奈良国立博物館提供)



【図4】同 側面
(奈良国立博物館提供)

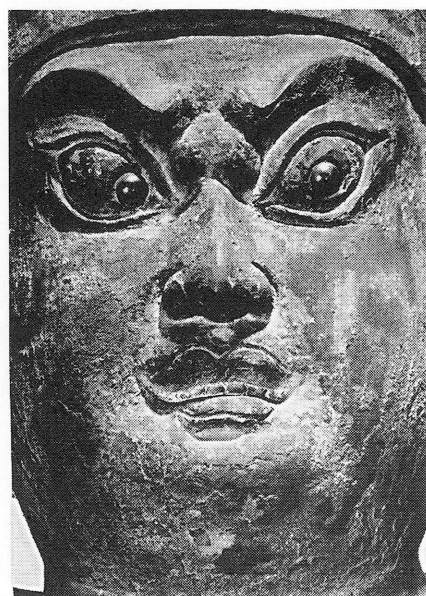


【図5】同 地天女・二鬼
(奈良国立博物館提供)

同形式である。本像と東寺像に見られる表現上の共通点と考えることができる。次いで甲冑部は、金箔の上からいわゆる金鎖甲が墨描されている。本体自体に傷みの少ないことを考慮すれば、造像当初の小札文様を踏襲している可能性が高い。この二点から本像の図像的典拠として、東寺像ないしこれに極めて近い形式の図像の存在が予想される。この点に関しては、丸山氏も同様の見解を提示しておられる。これに加え、従来注目されていない点として、「地天女」が雲気もしくは唐草を伴っていない形式であることを指摘したい。中国・四川地方の兜跋毘沙門天像、従来より東寺像との類縁関係が指摘されているスタイン請来の敦煌出土・毘沙門天像（絵像 大英博物館）、及び醍醐寺藏智泉様「毘沙門天像」【図8】等、大陸の作例及び請来図像においては、「地天女」はほとんど例外なく雲気ないし唐草中より上半身を表す形式をとっている。この表現が意味するものの検討は今後の課題であるが、日本の兜跋毘沙門天像の図像的ルーツを限定しうる一つの指標となる。また二鬼に関しても石山寺像では両手を交差させるものの、『別尊雜記』所収の延暦寺前唐院像【図9】及びこれと関連の深い成島毘沙門堂像をはじめ他の作例に顕著な剣印を結ばず、五指を伸ばしている点が異相を示す。

東寺像の位置づけ

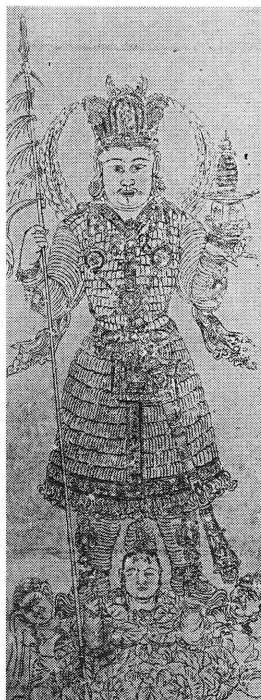
ここで石山寺像の具体的な分析に入る前段階として、兜跋毘沙門天の根本像とも言えるべき東寺像をめぐる近年の諸説を展望しておこう。先述した岡田氏は、従来半ば定説と化していた羅城門安置説が、伝承



【図7】兜跋毘沙門天像（面部）東寺
（『日本美術全集 密教寺院と貞観彫刻』）



【図6】兜跋毘沙門天像（面部）石山寺
（奈良国立博物館提供）



【図8】智泉様毘跋毘沙門天像 醍醐寺
(至文堂『日本の美術 毘沙門天像』)



【図9】延暦寺前唐院毘跋毘沙門天像
(『別尊雜記』所収)
(『大正新修大藏經』図像部)

の段階から確たる根拠を伴わない実体無き定説へと変貌する過程を明らかにされ、あわせて東寺像自体の造像年代に關しても再検討を加えられた。⁽⁹⁾これに対し羅城門安置説を事実として肯定される松浦氏の論考に關しては、石山寺像との関連で次章において触れることとする。

岡田氏説の要旨は、本来この言説の典故となった『東宝記』の草稿本書写段階においては注記に過ぎなかった羅城門安置説が、現行の流布本清書段階における本文への混入によって、何らかの信憑性を帯びた証拠に基づくような権威性を獲得し、結果として流布されたものであり、信頼できる史料中には見出せないこと。また像自体の形式も、従来想定されてきたような、西域式の甲制が嚴密に伝えられているわけではなく、よりオリジナルな姿を留めると考えられる大陸の作例と比較すれば、西域式甲冑の上から唐式甲制である胸甲を重ねていること。この形式の毘沙門天像が大陸では九世紀半ば以降に確認されること。これらの点により、まず東寺像自体の年代が、従来想定されていたよりも下り、九世紀半ば以降の造像と考えられること。日本へはこれ以降の請来に掛かる可能性が高いことを詳細に述べられた。ついで「東寺式」と分類されていた彫像・絵像類の中に、東寺像を典拠としない像の存在する可能性を指摘されている。

第一章 日本における近年の毘跋毘沙門天研究と石山寺像

一、松浦氏説

第一は先述した松浦正昭氏の論考である。⁽¹⁰⁾その主旨は、現在の東寺

像が最澄によつて請来され、彼の目指した「天台新仏教」における護国修法の本尊として桓武天皇に献上された「唐国仏像」⁽¹¹⁾にあたり、後に羅城門に安置されたものであるとする。同じく最澄によつて延暦寺文殊堂に祀られた著名な「屠半様」毘沙門天も、同様に護国修法の目的で造像されたものである、という点にある。氏は、『東宝記』によるとかつて東寺像の内刳に見られた刻銘に記されていたとされる羅城門安置説を事実と認め、これにより東寺像の請来を最澄の入唐時にさかのぼりうるされる。その根拠の一つとして兜跋毘沙門天像の中国的的変容を岡田氏とは別の視点で解釈された。すなわち兜跋毘沙門天像の西域の様式から中国的様式への展開を、甲冑形式の変化ではなく、天衣の一種である「帛帶」の出現を基準に区分すべきであり、これのない兜跋毘沙門天を中唐様、これをまとうものを晚唐様として区分されている。氏のこの区分によれば「帛帶」のない東寺像は最澄入唐時には大陸において既に存在していたことになり、逆にこの「帛帶」がみとめられる日本で現存最古の像である石山寺像【図1】は、晚唐様を反映したものとなり、安祥寺の開山惠運による新図像の請来によつて製作されたもの、と推定されている。氏の見解は、石山寺像に関し、その起源を説明しうる解釈の一つではあるが、筆者は必ずしもこの見解には同意できない。まず氏が本像を惠運様と推測される根拠であるが、同寺本堂に安置される不動明王像が頭部にいたたく鬘の形式が惠運請来様の図像に見えるものと同型であるとされ、これと作風・時代性の近い兜跋毘沙門天像も同じく惠運様を示すものであらう、とされる。⁽¹²⁾しかしすでに指摘されているように、同寺不動明王像と惠運

請来様の鬘の数は一致せず、惠運様とみなしうるかは疑問視する向きもある。⁽¹³⁾さらに不動明王像と毘沙門天像は確かに面部に近い作風を感じさせるが、様式的類似が同じ図像請来者の影響のもとに製作されたことを裏付けるわけではない。様式上の共通性は、両者が同系の工房によつて造像された事を示唆する根拠とはなるが、その典拠となつたであらう図像の請来者を特定できる資料とみなす事にはやや疑問が生じざるをえない。

二、丸山氏説

次に丸山士郎氏による東京国立博物館所蔵天部形立像に関する論考が注目される。⁽¹⁴⁾氏はこの天部形立像に関して、形式および表現上の特徴から兜跋毘沙門天として造立された可能性が高いことを論証されている。その過程において石山寺像について東寺像との図像的類似性に関して分析されている。この点は既に先行して若干の指摘が存在するが、⁽¹⁵⁾本論もこの観察所見には注目したい。丸山氏らの指摘に関してはいかなる妥当性がみられるであらうか。以下検討してみよう。まず第一に注目すべき点は、東寺像・石山寺像の瞳の位置【図6、図7】である。丸山氏が指摘されるように、一般的に神将像は激しい動勢をとるものが多く、これに伴つて視線も正面を向かないものは数多く存在する。しかしここで注目すべき点は、東寺像・石山寺像は腰をひねる以外に体はほぼ直立しており、面部と体部の方向性は一致しているにもかかわらず、瞳のみが向かつて右方向に向けられている、という奇妙さにある。この点は、他の多くの兜跋毘沙門天像に関しても重要な問題を含んでいよう。すなわち、両者の視線は向かつて右側の塔に向

けられているものと考えられる。この表現は四天王中の一体として造立された毘沙門天像の中でも、一三世紀前半の興福寺北円堂像のように作例は皆無ではないが、日本での造像例としては希少例に属する表現である。兜跋毘沙門天のルーツである大陸の作例においても、必ずしも塔に視線を向ける作例が多いとは言えず、このことから、視線が塔をみつめる東寺像と石山寺像とは、図像的に近似しているとする解釈は妥当であろう。一例として奈良国立博物館像が、東寺像を模しながら視線をほぼ正面に向けているという事例があげられよう。これは模刻を行なった仏師が、東寺像の視線の意味については十分に理解していなかったことを示している。この面部と視線の方向性が一致しない、という特徴はかつては東寺像のみの不可解な特徴とも考えられていたが、実際には「塔をみつめる」という意味合を有するものであり、日本においては東寺像から流布した表現形式である可能性が想定されよう。

第二に東寺像・石山寺像がわずかに開口して上顎の歯列を見せている点【図6、図7】があげられる。丸山氏が指摘されるように平安初期、独尊形の毘沙門天像としてはこれは異例な事で、殊に歯列を強調してあらわす例は後代の毘沙門天像にもあまりその例を見出せない。石山寺像とほぼ同時期と考えられる福岡・観世音寺兜跋毘沙門天像【図10】は、表情に怒気を含みながらも唇は引き結ばれている。【図11】この開口、歯列表現を伴う形式が、日本の毘沙門天・多聞天彫刻の系譜中においても、希少であることに注目すると、殊に石山寺像の、歯列を見せることが主目的であるかのようなわずかな開口の仕方は、同様の表現を見せる東寺像からの影響という原因を想定しなければ理解し難い表現である。

第三に金鎖甲の問題があげられる。石山寺像では補彩ながらこの甲制が認められる事は述べたが、丸山氏はこの部分に関しても東寺像との共通性で理解しうることを示唆されている。さらに氏は石山寺・東寺両像の脛当に施された珠文帯と、そこから唐草文を表す点にも注目され、前者は彩色、後者は彫刻によつて表すという点に相違は認められるものの、やはり共通点として捉え得ることを指摘されている。石山寺像の唐草文は造像当初の状態を留めると判断するにはやや色彩が単調すぎる事が懸念されるが、当初の文様形式を踏襲している可能性は高く、今後の調査が期待される部分である。また西大寺十二天画像中の毘沙門天像が、やはり体を正面に向けてながら視線を横に振ることも注目すべきであろう。同像は明確な制作時期が不明なものの足下に「地天女」が描かれており、『別尊雜記』像【図9】の如き神将形の兜跋毘沙門天として、猪川氏らによつて早くより注目されている作例である。本像は明らかに顔面・体部を正面に向けながら視線を右に振っており、この意味では東寺像と全く共通する形式を示している。この様に見てくるとき、あらためて石山寺像の特異性がクローズアップされよう。はたして本像は従来の指摘どおり、延暦寺文殊堂像の系譜に属する古例として分類しうるだろうか。丸山氏はさらに猪川氏が神将形の祖形を大陸に想定された点に對しても、石山寺像の例に立脚し、日本において東寺像からの影響を受容したという視点で説明しうる可能性を提示されている。氏のこの指摘は本論における石山寺像の形式的系譜といった問題にとどまらず、従来の東寺像系に対する延暦寺系の存在という大区分の実態に再検討を迫りうる可能性を秘めている。ここでさらに付言しておきたい事として近年

の神田氏の提言⁽¹⁶⁾がある。氏は本論で詳細に検討している聖宝と上醍醐・石山寺の関係について、注意すべきことを初めて示唆された。詳細に論じられているわけではないが、重要な指摘である。

以上の検討によって明らかとなった石山寺像の図像上の特色を整理してみよう。

三、石山寺像の図像的検討

先述の如く石山寺像は、猪川氏によってかつて「神将形」の古例として分類されていたが、丸山氏らの指摘される様に、実際には東寺像との部分的な共通点が顕著である。これらの何点かは一一世紀以降に出現すると考えられる東寺像の模刻においてはかえって認められなくなるもので、一見した形式上の相違に対して、意外なほどに両像の共通性を浮かびあがらせてくれる。すなわち、造像にあたって工人に何らかの特別な指導・注意が与えられなければ、省略されてしまいかねない、一見微細に思われる部分での「共通項」という特殊事項である。先述の瞳の位置と同様、東寺像の模刻ではその本来の意味が既に忘却されており、結果として省略されることになったのであろう。以下これを列挙すると、

- (1) 両者の瞳の位置——東寺像と石山寺像は共に視線を捧げ持った塔に向けている。【図6、図7】
- (2) 両者の歯並表現——両像とも口を軽く開いて歯列を見せる
〔智泉様毘沙門天像〕も同様の表現をとる【図6、図7】
- (3) 胸甲部の鬼面——通常の神将形にはあまり用いられず、「兜跋」毘沙門天の一特色である。【図1、図11】



【図10】兜跋毘沙門天像
福岡 観世音寺
(至文堂『日本の美術 毘沙門天像』)



【図11】同 面部
(至文堂『日本の美術 毘沙門天像』)



【図12】多聞天像 東寺講堂
 (『日本彫刻史基礎資料集成・平安時代
 重要作品編』中央公論美術出版)



【図13】広目天像 (焼損) 東寺食堂
 (『東寺の天部像』東寺宝物館)

- (4) 肩口の獅噛——『別尊雜記』像やその影響下にあると考えられる岩手・成島毘沙門堂毘跋毘沙門天像には見えない。【図1、図9】
- (5) 腰を向かって右に軽くひねる事。「智泉様毘跋毘沙門天像」もやや腰に傾斜が見え原本では腰をひねっていた可能性があるがある。【図1、図2、図8】
- (6) 腰甲の上に腰覆いを重ねる事(東寺像では金鎖甲の上に大きく被さっている)【図1、図2】
- (7) 向かって左の邪鬼に、天衣の残欠と考えられる造り出しの見える事⁽¹⁹⁾。「智泉様毘跋毘沙門天像」によって一種の天衣である事が確認できる)【図1、図2、図8】
- 以上の点に加え、先述の如く石山寺像は補彩ながら金鎖甲の甲冑をまとう。東寺像との類似性が指摘されている「智泉様毘跋毘沙門天像」【図8】に関しては、はじめて書写が行れたとされる時期は有力な入唐求法僧のいない空白期にあたる事から、その原本は空海請来の図像であった可能性が高いとされる。このためかつては東寺像との共通点が強調され、その請来者を空海に比定する論拠ともされていた。⁽²⁰⁾ しかしながら東寺像と比べて甲冑の小札の形式が異なり、中国式の胸甲を着用しない事などを踏まえれば、岡田氏の指摘されるとおりむしろ東寺像より古様な形式を伝えていると考えられる。⁽²¹⁾ 一方、大陸の毘跋毘沙門天像には足下の二鬼に衣端をかける例はほとんど見出せず、また歯並を見せる作例も基本的に見当たらない。この事から東寺像、石山寺像、智泉様図像の三者は、非常に微細な共通点であるが故に、むしろ典拠の極めて近似する、もしくは同一であることを強く予想させ

る意外な形式的特徴を共有しているのである。ちなみに智泉様図像は足下の二鬼が結ぶ印がやはり五指を伸ばす形を示し、石山寺像との類似性をうかがわれる。これに対し『別尊雜記』像が実際にどの程度、文殊堂安置像の姿に類似しているかは疑問であるが、少なくとも延暦寺像と東寺像には、甲冑の形式以外におそらく二鬼の肩に掛かる特徴的な天衣の有無など、細部においても明確な相違点が存在した可能性が高い。観世音寺像【図10、図11】は、図像的には石山寺像に近い要素を有する。（肩に獅咬・胸甲に鬼面を表した神將形）しかしながら手勢の明らかな相違（右手を垂下させ、後補の宝棒を持つ）、片足を遊脚とし、また獸面を脚胖とする事等、東寺・延暦寺系、いずれの特徴を示すとも考え難く、まさにこれこそまったく別系の図像を典拠とした第三の形式を示す作例であるかもしれない。⁽²²⁾

以上の検討よって、石山寺を像單純に延暦寺神將形の系譜中に位置づける事には問題があり、何らかの特別な指導がなされなければ見落とされがちな特殊な表現の共有という観点からはむしろ東寺像との親近性を示す可能性が浮き彫りにされた。それではこの様な神將形と東寺像的要素との不可思議な形式の混在をいかに読み解くべきであろうか。

第二章 石山寺兜跋毘沙門天像の造像と出現背景

一、平安初期の石山寺

前章において示された二形式の混在という現象を明らかにするため、まず平安初期の石山寺において兜跋毘沙門天像が造立されるに至

った背景を検討してみたい。石山寺は広く知られているように、八世紀後半の草創当初は東大寺の別院としての性格を有していた。しかしながら宮自体の造営が中断した後、官寺として朝廷の庇護を受けながらも、その性格の変貌を余儀なくされていたと考えられる。九世紀初頭近傍に延暦寺が出現し、また同後半、貞観年間（八五八―八七七）には地理的に近い山城・笠取の地に醍醐寺が建立され、ここより聖宝を初代座主として迎えたことにより、真言の大寺院として現在に至る石山寺の性格が決定されたのである。創建時においては特定の変化観音ではなく、一般的な「観音菩薩」として造像されたと考えられる本尊の尊格が、二臂の「如意輪観音」として確定されるに至ったことも、聖宝の如意輪観音信仰によると考えられる。⁽²³⁾ 兜跋毘沙門天像に関しても九世紀後半から一〇世紀にかけての造立と推定されるが、残念ながら現在同寺には造立にまつわる説話、記録は伝えられてない。わずかに『石山寺縁起』⁽²⁴⁾ 卷六に、健久年間のこととして中原親能が山城・和束の賊を鎮定するために石山寺に参詣祈願したところ、合戦直前に至って毘沙門天の示現をうけ、勝利するという説話が見える。⁽²⁵⁾ この毘沙門天が平安初期より同寺に安置されていた兜跋毘沙門天像ではなかっただろうか。もともとこの説話はあくまで健久年間に時代が設定されているので、この推定が妥当であったとしても直接に石山寺像の造像理由を説明してくれるものではない。それでは石山寺像の造像背景としてはどのような事態が想定できるであろうか。

二、石山寺像と聖宝

石山寺像の存在を考察する上において、平安初期の同寺に多大な影

響を及ぼした醍醐寺との関係は殊に注目されるべきである。既に先学によっても上醍醐如意輪堂の尊像構成が石山寺と類似することに關しては若干の指摘が行われているが、⁽²⁶⁾ 実質的な検討は未だなされていない。上醍醐と石山寺像をめぐる問題で初めに考察されるべきは、神田氏も指摘されるように同寺の初代座主とされる聖宝の存在である。周知のとおり彼は東密・小野流の祖となった人物で、東大寺に遊学中、修練の場として石山寺を選び、しばしば両寺を往復したと考えられる。⁽²⁷⁾ これが機縁となり、同寺の座主に迎えられただけでなく、付近の笠取山を修行に適した霊地として見出し、このことが結果として醍醐寺創建につながったとも推測されている。彼が上醍醐に最初に建立した堂宇は准胝堂と如意輪堂であった。⁽²⁸⁾ 『醍醐寺根本僧正略伝』⁽²⁹⁾ 『醍醐寺縁起』⁽³⁰⁾ 『醍醐雜事記』によると、この二つの堂宇は彼の私的な念持仏を安置したとされており、彼の個人的な信仰のあり方を探る上で重要な鍵となる場である。聖宝は分けても如意輪觀音を深く信仰しており、石山寺本尊が二臂如意輪觀音とされるにあたって、彼の信仰が強く影響したと考えられることは先述したところである。この如意輪堂本尊と石山觀音は醍醐寺においては同体視されており、⁽³¹⁾ 「石山觀音が上醍醐如意輪堂に常に通つて示現している」とさへ託宣されたほどの密接な関係が成立していた。一方『理源大師行実記』⁽³²⁾ によれば、この堂宇が鎮座する笠取山の地主神・横尾明神は、毘沙門天が本地であるとされていたという。他に見えない伝承であるが『醍醐寺縁起』によると上醍醐如意輪堂の毘沙門天像は聖宝が手ずから刻んだものとされており、東大寺中門・吉野金峯山など各地で彼が毘沙門天を造立し、⁽³³⁾ 彼の個人的

な信仰として毘沙門天信仰が強く顔をのぞかせている事に留意すると、この如意輪堂に「兜跋毘沙門天」が奉安されていた事と何らかの関係を窺わせる伝承であるといえよう。聖宝の活動からは如意輪觀音・准胝觀音に次いで毘沙門天をはじめとする天部を強く信仰していた形跡が読み取れ、彼が私的な願いを込めた堂宇にこれらの尊像を造像安置させたであろう事は想像に難くない。いま、如意輪堂と准胝堂の安置像を『醍醐雜事記』によって列挙すると、

【如意輪堂】

奉安置如意輪像一鉢 高五尺 帝尺天一鉢

四天王各一鉢 兜跋毘沙門一鉢

准胝像一鉢 二尺許云々

【准胝堂】

奉安置准胝像一鉢 高五尺 如意輪像一鉢 高五尺

前執金剛神像一鉢 高五尺 左毘沙門像一鉢 等身

右帝釋像一鉢 等身 又前准胝像一鉢 等身

是堀河院御造立也

以上となる。

これらの諸尊像は不幸にして現存しないが両堂にいずれも毘沙門天が安置され、しかも本尊はじめ、四種まで安置尊格が共通する点に、聖宝とその周辺の信仰の在り様が伺われる。殊に如意輪堂に「兜跋毘沙門天」が安置されていたという事実は、石山寺像が聖宝の意図により上醍醐に倣って造像された可能性を推測させる。石山寺像と上醍醐の強い関連性はこの他にも、石山寺本尊と共に同寺本堂内陣に安置さ

れている二体の「神王像」が、「藏王権現」、「執金剛神」とされている点にも認められる。本尊の尊各同様、聖宝の信仰の反映とも言えよう。石山寺像が毘沙門堂に安置される事は先述したが、現在でも本堂外陣には、近傍の毘沙門堂より移座されたと伝わる平安末の毘沙門天像が安置されており、かつて石山寺像が本堂に安置されていたとすれば、この像が本来の石山寺像の由来を襲っているという可能性も考慮されよう。であるとすれば、石山寺本堂の尊像配置も上醍醐にきわめて近い形式を伝えているという事になる。

さて一方聖宝と毘跋毘沙門天との関係に眼を向けてみよう。上醍醐の「毘跋毘沙門天」は法量・像容共に不明である。ただ「毘跋」というではない通常の毘沙門天像が明確に区別して記述されている事から、なんらかの異形の毘沙門天像であると認識されていた事は伺えよう。聖宝が醍醐寺を創建した時期には、東寺像の請来者とも目される宗叡は既に帰朝しており、⁽³⁴⁾毘沙門天関連の請来經典・図像類は全て出揃っていたと言つてよい。聖宝の毘沙門天に対する強い関心をふまえれば、最も新しく、かつ多量に請来された經典・儀軌を上醍醐如意輪堂安置像の典拠した可能性は高い。また石山寺像が上醍醐像の安置像に倣つて聖宝ないし彼に近い人物によつて造像された可能性を裏返せば、上醍醐像も石山寺像同様、東寺像の特徴を部分的に包含する「神将形」であった可能性が考えられよう。ここで改めて確認しておきたい事実は、⁽³⁵⁾東寺像の模刻が出現する一一世紀以降の「毘跋毘沙門天」観である。この時代、おそらく東寺像への関心の高まりとそれによつて言説の流布によつて「毘跋毘沙門天」という「新しい」尊像が日

本において形成され始めたと考えられる。しかしながら、種々の事相書中における、その像容に関する記述はどの程度の具体性を有しているであろうか。実は戟と塔を捧持し、地天女に両足を支えられ、宝冠に鳥形を戴く、という以外には像の服制に関してほとんど触れられていないのである。⁽³⁶⁾『九院仏閣抄』⁽³⁷⁾において、延暦寺毘沙門堂の「伴国道」寄進像が「大アラメの鎧」を着用している、とする記述がほぼ唯一のものと言つてよい。すなわち猪川氏が「毘跋」と通常の毘沙門天は地天女の有無による、とされた分類法⁽³⁸⁾は、まさに一一世紀以降の事相書編者がいっていた毘跋毘沙門天に対する主要な認識でもあったことになる。また東寺像の忠実な模刻が一一一二世紀に現れる、という事実は、東寺像の請来及び石山寺像や観世音寺像の造立段階において、東寺像の服制上の特異性が、毘跋毘沙門天という尊像の性格を認識する上において、さほど注目されていたわけではない事を示している。この傍証としては、東寺講堂の多聞天像【図12】が、後世多くの補修を被りながら、神将形の毘跋毘沙門天として伝存されている事に注目したい。講堂像自体が平安前期に遡りうるか問題を残している現段階では推測の域を出ないが、この像が空海のプランニングを反映しているとすれば、平安前期九世紀段階の毘跋毘沙門天に対する認識も甲制の特殊性に重きを置かず、一一世紀以降と同様、基本的には地天女の有無、といった部分に他の神将像との重要な区分が置かれていたと考えられはしないだろうか。

このような視点に留意すれば『醍醐雜事記』において像容の記述が見られないことに対し、一方で単なる毘沙門天ではなく「毘跋毘沙門

天」と明記する事により、地天女を有する異形像、といった程度の共通認識が当時すでに存在した事がうかがわれる。既に東寺像の有する細部の図像的意味は忘却されていたらしい一一世紀以降においては、醍醐寺像が仮に石山寺像の姿に近い、東寺像的特徴を付加された神将形であったとしても、それは東寺像を規範とする兜跋毘沙門天像の大きな形式的範疇に包括され、わずかな部分の特異性は、特記すべき事柄ではなかったであろう。

三、新様毘沙門天としての石山寺像

さて前節までの検討を踏まえ、石山寺像に認められる東寺式・神将式という二形式の混在についてあらためて検討してみよう。

石山寺は付近に延暦寺、園城寺が存在する事から台密と聖教典籍類の交流が認められる。『叡山大師伝』『行歷抄』等が同寺に伝存していることはその最たるものといえよう。かつて猪川氏が石山寺像【図1】を延暦寺神将式の系譜に位置づけられた背景には、同じ近江国内におけるこのような人と物の動きを念頭に置かれていたのではないだろうか。しかしながら先述の如く石山寺と上醍醐は聖宝という人物を紹介して地理的要因以上に深い関係で結ばれていた。この事実に着目する時、石山寺像の典拠としては、延暦寺よりも上醍醐にもとめられる可能性が非常に強まることは疑えない。石山寺においては毘沙門天信仰の強い聖宝によって、造立・安置されたのではなかろうか。上醍醐にも自ら毘沙門天を造像安置したと伝えられる聖宝が、石山寺の尊像解釈を上醍醐に則って再構成した可能性は充分に考えられよう。その造立時期としては、聖宝の在世中である九世紀後半から一〇世紀前半が妥当

であろう。先述した像の様式的な特徴もこの推定に符号する。さらに東寺像に起因すると考えられる部分的な特徴も、東寺長者となった聖宝との関連を想定すれば説明が可能である。東寺像の原所在に関しては未だ定説をみないが、岡田氏の推定される如く宗叡の請来によるものであれば当初より東寺に伝えられていた可能性は高く、又一方羅城門上に安置されていたとしても、最終的に東寺に移安される事となった結末を考慮すれば、その管理営繕に関して早くより東寺が深く関与していたという先例が存在したためであるかもしれない。いずれにせよ聖宝主導下の寺家工人達が何らかの形で東寺像の姿を目にする機会が存在したと考えられる。聖宝が造像を主導したことで知られる東寺食堂諸尊の内、広目天像(焼損)【図13】が箆手と脛当てに海老箆手を用いている事に注意したい。⁽³⁹⁾殊にその肘には東寺像・智泉様兜跋毘沙門天像等【図2、図8】の海老箆手に共通して認められる花紋型の装飾が施されており、⁽⁴⁰⁾東寺像もしくは智泉様系統図像の部分的な表現が受容されている一証左として石山寺像との類似性を認めることができる。この事実をふまえれば、聖宝は自らが主導する天部像の造像にあたって、東寺像もしくは智泉様系統図像の特徴をデザインに取り込ませていた可能性が指摘できよう。しかしここで重視すべきは、あくまでもそれが部分的な受容に留まっているという点で、東寺像の忠実な模刻にはなっていないという事である。ここでさらに注目すべきは各種事相書中の毘沙門天法本尊に関する記述である。そこにはまさに先述の如く、ほとんど甲制に対する関心を見出すことはできない。そもそも毘沙門天法の本尊形式は儀軌に異説が多く、厳密な規定が存在しな

い。⁽⁴¹⁾このため石山寺像の制作にあたっては新しく請来された東寺像の有する、特殊なモチーフが抽出され、奈良時代以来の通常神将形に付加される形で、延暦寺像に起源を有しない新様の折衷像が形成されたのではなからうか。もともと石山寺像の腰高なプロポーション【図1】に留意すれば、東寺像の全体的なシルエットが参考とされた可能性も考慮すべきであろう。

また本稿では十分に検討しえないが、その造像にあたっては聖宝主導のもと、東寺食堂や上醍醐の諸尊を手がけた寺家工人達の手になったことが考えられよう。⁽⁴²⁾先述の石山寺本堂不動明王像をはじめ、同寺に伝わる平安初期の諸尊像に関しては、いまだ体系的な論考はなされていないが、従来、同じ近江地方の平安初期彫刻との類似性が指摘されている。⁽⁴³⁾筆者はこれに対し近江という地域性を越えてむしろ東密とそこに所属する寺家工房という、宗派性の問題からの視点を提唱したい。一例として先述の東寺食堂像【図13】について焼損以前の状態を確認すると、同寺講堂像に見られる激烈な忿怒表現や激しい動勢が抑制されており、身体各部に厚みのあるどしりとした作風は、石山寺像との共通性を感じさせる。一方ではこれと相違する、面部の瘤状に隆起した筋肉表現や大きめの上半身といった特徴が認められるが、これは東寺像の主題とモチーフをより濃厚に受け継いだ独尊の毘沙門天像である石山寺像と、通常の四天王としての食堂像という、相互の主題の相違に基ずくものであろう。この両者はともに聖宝という造像主導者を介在させる事により、その様式的親近性を説明しうるのである。

結論

石山寺兜跋毘沙門天像【図1、図6】に関して以上のように、これまで縷々述べて来た問題点をここで整理し、結論と今後の展望を記して結びとしたい。

一、石山寺像は従来分類されてきた、延暦寺系の神将形に属するものではなく、近年指摘がなされているように、一見した甲冑形式とは異なり、東寺像との類似性がより本像の形式的な根幹を形成している。

二、その造立は、東寺像を典拠とし、そこから特徴的な形態を抽出し、通常の神将形に付与する事で新しく日本で形成された可能性が高い。

三、その造像にあたっては、石山寺の密教化に大きく貢献した聖宝の関与が強く予想される。彼の私的な信仰の場であった上醍醐如意輪堂の尊像構成と石山寺本堂の尊像配置の類似性がその証左となる。さらに本像の造立年代は聖宝の在世中である九世紀後半である可能性が強まった。

四、また石山寺像を中心とする同寺の他の平安初期尊像に関しては、その様式を近江という地域性で説明されることが多かったが、聖宝を介して東寺・醍醐寺等の寺家工人が造像に携わった可能性を考慮すべきであろう。

以上の四点が本編の検討によって指摘しえた。この内、一、と二、は、石山寺像のみに留まらず、兜跋毘沙門天像の形式的系譜全体に

及ぶ問題であり、今後さらなる検証を重ねていきたい。この点からは、従来あまり論じられる事のなかった、東寺像の模刻が出現する要因に關しても、新たな疑問が派生してこよう。毘跋毘沙門天像の請来された九世紀段階においては、忠実な模像の存在は確認されていないが、おそらくは一一世紀に降ると考えられる奈良国立博物館像・清涼寺像等はいかなる根拠によって造像されたのか。この点に關しては、先述した羅城門安置説の流布と、そこから派生した東寺像への特別な信仰の発生という仮定が想定されよう。

また四に關しては、平安初期東密寺院における寺家工房の形成と、各寺院間の工人の移動による、独特の「真言密教彫刻」⁽⁴⁴⁾成立の場に石山寺も包括されることを示唆したものである。

毘跋毘沙門天をめぐる問題は、九、一〇世紀段階における東寺像の部分的特徴の流布、また松浦氏の指摘される延暦寺の最澄請来像と東寺像の図像的な親近性⁽⁴⁵⁾など、時間軸の縦横に幾重にもまたがった複雑な様相を呈している。その一方で岡田氏説の登場など、からまった糸を解きほぐそうとする有効な試みも行われつつある。本論はこのような研究状況の中にあつて九世紀後半における東寺像の部分的形式の模倣による折衷様式出現の問題を、石山寺毘跋毘沙門天像を中心に猪川氏とは別の視点で彫刻史上に仮に位置づけてみた。石山寺像はこれにより、延暦寺像の一系統とする従来の位置づけを離れ、丸山氏や神田氏の示唆に基く、九世紀代における東寺像からの影響によって成立した新様毘沙門天像、として新たな価値を付与しうる可能性を指摘することができた。これにより毘跋毘沙門天全体の造像状況に、特定図像

の忠実な模像がほとんど認められない九、一〇世紀までと、造像において忠実に模されるべき典拠として東寺像の位置づけが定まる一一世紀以降、という二段階の展開が存在したことが予想されよう。さらに石山寺における平安初期尊像に關して東寺・醍醐寺等の寺家工人の介在とその様式上の類似性という問題を見出すことができた。今後の検討課題としたい。

石山寺像の新たな位置づけを示す一試論として識者のご叱正を賜れば幸いです。

〔注〕

(1) 猪川和子「地天に支えられた毘沙門天像」『美術研究』二二九 一九六四年

(2) 岡田健「東寺毘沙門天像」(上) (下)『美術研究』三七〇、三七一九九九年

※本像に關連しては既に多くの論考が存在する。その一部を列挙すると源豊宗「毘跋毘沙門天像の起源」『佛教美術』第一五 一九三〇年

松本榮一「毘跋毘沙門天像の起源」『国華』四七一 一九三〇年

「毘跋毘沙門天図」『燉煌画の研究』東方文化研究所 一九三七年

松本文三郎「毘跋毘沙門天巧」『東方学報』京都一〇—一 一九三九年
佐々木剛三「毘跋毘沙門天像についての一考察」『美術史』三八 一九六〇年

(3) 近年では田辺勝美氏が、毘跋とは「ストゥーパ」の音写の一種で、日本の事相書編者が毘沙門天の持つ塔の意義に着目した結果生み出された名

称ではないか、とする仮説を提示されている。〔毘沙門天像の誕生〕吉

川弘文館 一九九九年

- (4) 松浦正昭「毘沙門天の請来と羅城門安置」〔美術研究〕三七〇 一九九八年

- (5) 丸山士郎「東京国立博物館保管天王立像と兜跋毘沙門天」〔MUSEUM〕五六一 一九九九年

- (6) 神田雅章「城門楼上の毘沙門天について」〔美術史学〕一六 一九九四年「平安時代兜跋毘沙門天彫像の研究」〔鹿島美術研究〕年報第一四号別冊 一九九七年「兜跋毘沙門天の謎」〔日本の国宝別冊 国宝と歴史の旅〕神護寺薬師如来像の世界 朝日新聞社 一九九九年

- (7) 醍醐寺蔵「四種護摩本尊及眷属図像」所収〔佛教図像集〕内

- (8) 「大正蔵経」図像部第三

- (9) 岡田氏前掲論文(2) 参照

- (10) 松浦氏前掲論文(4) 参照、氏は兜跋毘沙門天を、その起源であるホータンに基づいて「于填毘沙門天」と呼ぶべきものとされる。

- (11) 「日本後紀」延暦二十四年条

- (12) 同様の見解としては、中野玄三「日本の美術 不動明王像」(至文堂)等

- (13) 特別展図録「特別展 観音のみてら石山寺」(奈良国立博物館 二〇〇二年) 解説

- (14) 丸山氏前掲論文(5) 参照

- (15) 「重要文化財 彫刻Ⅳ」(毎日新聞社 一九七四年) 所収巻頭鷲塚泰光氏解説

- (16) 神田氏前掲(6)「兜跋毘沙門天の謎」参照

- (17) 猪川氏前掲論文(1) 参照

- (18) 奈良国立博物館像や清涼寺像では、齒列表現が不分明となり、腰のひねりも弱くなっている。また脚下の二鬼は、東寺像よりも「別尊雜記」像

に見える邪鬼に近い形式となっている。

- (19) 神田氏前掲論文(6)「城門楼上の毘沙門天について」〔美術史学〕一六 一九九四年 においても本論同様の視点が提示され、氏は法隆寺金堂四天王像の邪鬼に見られる數物状の衣と同様の意味かと解されている。

- (20) 佐々木氏前掲論文(2) 他

- (21) 岡田氏前掲論文(2) 参照。しかしながら両者の細部に到る共通性は見逃しがたく、東寺像の請来年代に加え智泉様図像の伝存経緯と、どの程度原図を忠実に伝えているか否か、という点に関しても一度検討がなされるべきであろう。

- (22) 一つの可能性として、観世音寺像は延暦寺系統の図像と東寺系統図像の折様の早期作例という可能性も考えられよう。猪川氏は平安前期に遡る作例に関しては折衷様に分類されていないが、石山寺像のように九世紀代に遡りうる折衷様が存在することを勘案すれば、観世音寺像に関して可能性は残される。

- (23) 猪川氏前掲論文(1)、井上一稔「奈良時代の「如意輪」観音信仰とその造像―石山寺像を中心に」〔美術研究〕三三三 一九九二年 参照

- (24) 「日本の絵巻一六 石山寺縁起」(中央公論社 一九八八年) 参照

- (25) これに関して、観音の脇侍あるいはその団体としての毘沙門天が有する問題について鈴木喜博「毘沙門信仰の一形態について―不動・毘沙門研究序説―」〔仏教芸術〕一四九 一九八三年に詳細に類例が提示され、「観音所変の毘沙門天」と呼ぶべき両者の団体説が平安初期に存在した可能性を指摘されている。しかしながら石山寺や上醍醐に関しては観音と毘沙門の団体関係は不分明であり、むしろ聖宝個人の信仰事情の反映と捉えるべきではなかろうか。

- (26) 猪川氏前掲論文(1) 及神田氏前掲書(六)「兜跋毘沙門天の謎」参照

- (27) 大隈和雄「聖宝理源大師」(醍醐寺寺務所 一九七六年)、佐伯有清「人

- 物叢書 聖宝」(吉川弘文館 一九九一年)
- (28) 修驗聖典編纂会編『修驗聖典』(大学堂書店、三密堂書店 一九二七年) 所収
- (29) 財団法人鈴木學術財団編『大日本佛教全書』第八三卷寺誌上(講談社 一九七二年)
- (30) 中島俊司編(総本山醍醐寺 一九三二年初版、一九七三年再版) 所収
- (31) 『醍醐寺縁起』如意輪堂の条
- (32) 雲雅撰。佐伯氏前掲書(二八) 参照
- (33) 前掲書(二八)『醍醐寺根本僧正略伝』及び佐伯氏前掲書(二八) 参照
- (34) 宗叡の帰朝は貞観七年(八六五)。(『三代実録』)
- (35) この言説が『東宝記』以前に存在していた可能性は岡田氏前掲論文(2) によつて指摘されている。しかしこの言説に基づくと考えられる東寺像の模刻例が一一世紀以降の造像と推定されることに基けば同書の成立以前は秘説として扱われていたのではなからうか。
- (36) 台密・東密両者の事相書、寺誌に見られる兜跋毘沙門天に関する言説は岡田氏前掲論文(2) に詳細な表によつて分類検討が加えられている。
- (37) 『大日本佛教全書』
- (38) 猪川氏前掲論文(1) 参照
- (39) ここであげた東寺像とその他の諸像に関する海老簗手の共通性に関して、松浦氏は前掲論文(3) において殊に延暦寺文殊堂像の姿を模すと考えられる善水寺像と東寺像、智泉様図像との関連性について、同一の請来図像によるものとされている。
- (40) 推測ではあるが、田辺氏が提示されている塔を捧持することに力点を置いた「兜跋」の字義理解に寸して、東寺像はじめ九、一〇世紀の兜跋毘沙門天像に見出せる「塔を見つめる」という特徴的な表現がその由来となつている可能性も考慮できよう。

(41) 『覚禪抄』『阿沙婆抄』『白宝口抄』等でも毘沙門天法の本尊として複数の儀軌が記される。ここで注目すべきは毘沙門天の顔面の色彩に関する記述で、事相書ではほぼ一貫して黄金色あるいは白色と記される。しかしながら丸山氏も前掲論文(4) で触れられているが石山寺像は朱色系統で彩色されており、前記事相書所類が典拠とされる以前の、奈良時代からの伝統的色調を伝えていいると考えられる。

(42) 西川新次「聖宝・会理とその周辺」(『国華』八四八 一九六二年)、田中嗣人「寺院工房成立以前の仏師たち」(『日本古代仏師の研究』吉川弘文館 一九八三年)

(43) 猪川和子「石山寺の美術」久野健「近江の仏像」(『日本古寺美術全集』一 石山寺と近江の古寺) 集英社 一九八一年 他

(44) 伊東史朗「真言密教彫刻論」(『新編 名宝日本の美術』8 神護寺と室生寺) 小学館一九九二年) 参照

(45) 松浦氏前掲論文(4) 参照

〔付記〕

末尾ながら写真資料の複写転載に関して大本山石山寺座主鷲尾隆輝様を初め、総本山仁和寺、総本山醍醐寺、総本山東寺、観世音寺、小学館、至文堂、中央公論美術出版、奈良国立博物館のご協力を得ました。また本稿執筆にあたり齊藤 孝氏(佛教大学大学院教授) の丁寧な指導を頂戴いたしました。あわせてご厚情を謝す次第です。

(こんど) ゆずる

文学研究科仏教文化専攻博士後期課程

(指導・齊藤 孝 教授)

二〇〇三年十月十五日受理